

【要旨】清沢満之と真宗の教法*

—倫理的宗教および俗諦をめぐって—

藤原 智

はじめに

本稿は、明治の中期に真宗大谷派僧侶として、また宗教哲学者として活躍し、真宗大学（現、大谷大学）の初代学監でもあった清沢（徳永）満之の思索、特に倫理道德に関わる面を考察する。

まず注目するのは、明治三二年七月九日付で友人の清川円誠に宛てられた清沢の書簡である。そこには、前年の巢鴨監獄教誨師事件を念頭に真宗の教法に対して救済的側面と倫理的側面とに関わる疑問が記されている。この書簡が記された時期は、清沢が真宗大学の経営を打診された直後であることに注意したい。ここで清沢が真宗の教法に言及するのは、これからの宗門を担う若い学生にいったい何を教えるのかが特に課題となっていたからと考えられる。そして、この課題をもちつつ記されていたのが、当時の思索ノートである『有限無限録』と考える。

*編集委員会注 本稿は要旨である。全文は大谷大学学術情報リポジトリ (<https://otani.repo.nii.ac.jp>) の左記のURLに掲載。

<http://id.nii.ac.jp/1374/00008898/>

『有限無限録』は、「仁義礼智信」の「五常」から本格的な思索が進められる。この儒教に言われる徳目である「五常」から思索が始まる点に疑問を提示したのが子安宣邦である。そして子安は、近代日本における儒家的言語とは「教育勅語」を構成する言語だとし、『有限無限録』にこれに対抗する清沢の戦略的意図を見出す（『歎異抄の近代』白澤社、二〇一四年）。

本稿は、まず子安の疑問から真宗における儒家的教法の位置づけについて確認する。そして次に「教育勅語」との関係で子安も名を挙げる井上哲次郎と清沢の関係を考える。その上で、最晩年の清沢の俗諦論ともいうべき明治三十六年の「宗教的道德（俗諦）と普通道德との交渉」に至る清沢の真宗の教法への思索を明らかにする。

一 明治三十年代までの真宗大谷派で語られる「俗諦」（世間の教法）

清沢の理解を考えるに先立ち、当時の真宗大谷派（東派）教団において「五常」といった世間の道德に関してどのような一般的理解があったのかを確認する。

さて、近代以降の真宗教団において、宗教的真理を示す教えを「真諦」、世間の道德を示す教えを「俗諦」とし、この二つが真宗の教えを構成するものとして、その意味で「真俗二諦」といった言葉が多く語られる。その元になったのは覚如や蓮如の倫理道德に関する発言である。近世大谷派教学の大成者と言うべき深励は、真宗正依の經典である『無量寿経』（『大経』）の三毒五惡段を講じる際に、この段に説かれる「五善」について、覚如『改邪鈔』と蓮如『御文』を根拠に儒教に言う「五常」を勧めるものと位置付けた。この深励の見解は、明治以降においても踏襲された。そして明治十九年制定の真宗大谷派宗制寺法で真諦と俗諦との二諦相依が真宗の教えであると、公式に定められた。

清沢が真宗の倫理道德としてまず学びとったことは、おおむね上記の内容だと見て大過はないであろう。明治二十六年初頭、清沢は「俗諦は真諦より流出」するものとし（俗諦流出説）、その内容を「仁義礼智」や「忠孝廉節」「力を国に君

に尽すべし」などと確かめている。また、清沢最晩年の俗諦論というべき明治三十六年の「宗教的道德(俗諦)と普通道德との交渉」においても、あくまで真宗の一般論としてであるが、「俗諦」について「掟」「王法仁義」「五常」などと述べている。

江戸後期以来、一般的に真宗の世俗的教法(俗諦)は「五常」に代表されており、清沢もこれを共有していた。つまり『有限無限録』はその真宗の「俗諦」の教えを捉え直す試みであったと言える。それは当時の真宗の文脈の中で特殊な議論だったとは見えない。その上で、これを「教育勅語」に対抗する言説だとした子安の指摘を検討したい。

二 井上哲次郎の国家主義的道德と清沢満之

ところで、明治二六年初頭の清沢の発言には、「俗諦」として「力を国に君に尽すべし」などとあった。このような清沢の発言に対し、安富信哉・久木幸男はその後に清沢の考え・態度が変わると指摘する。特に久木は、明治二六年頃の「宗教と教育の衝突」論争に注目する。

明治二三年十月三十日に發布された「教育勅語」は、明治二四年九月の井上哲次郎『勅語衍義』を踏まえれば、究極的には「国家ノ為メニ死スル」ことに行きつく国家主義的道德を天皇から臣民に下すものであった。この「教育勅語」發布の直後、キリスト者の内村鑑三が不敬だと批判される事件が起こる。これを受けて、井上哲次郎によるキリスト教批判が明治二六年四月に刊行された『宗教と教育ノ衝突』を中心に展開されていき、大きな論争となる。井上は国家主義の立場から、キリスト教が「教育勅語」と相いれないとする批判を行うが、その批判は仏教にも当てはまるものであった。そして「この論争の進行中に、清沢は初めて「教育勅語」に対する批判的態度を明確に打ち出す」というのが久木の見立てである(『検証清沢満之批判』法蔵館、一九九五年)。

以上のことを踏まえて『有限無限録』を見てみよう。その「(五九)公ノ為ニセヨ」では、公の為にすることが大事だ

とはいっても自己が犠牲にされてはならない、ということが敢えて注意されている。つまり、清沢が『有限無限録』で示す無限に基づく道徳は、国家の為に身を犠牲にすべきとする井上哲次郎と根本的に方向性が異なるものである。この意味において、子安の指摘は妥当なものであろう。

三 井上哲次郎「宗教の将来に関する意見」と清沢の批判

『有限無限録』の頃までの清沢の道徳に関する思索は、先に見た「俗諦流出説」が基本的な枠組みであった。けれども、清沢最晩年に発表した「宗教的道徳（俗諦）と普通道徳との交渉」においては、「俗諦」について、それが実行できないことを自覚させるものと論じられる（俗諦案内説）。ここに、明治三二年末から明治三十六年の間で、清沢の道徳に関する発言の変化を指摘できる。この変化には社会的状況という外的要因が考えられ、それを検討する。

そこで考えたいのが、やはり井上哲次郎であり、明治三二年十二月発行『哲学雑誌』第一五四号に掲載された「宗教の将来に関する意見」である。井上は以前のキリスト教批判から一転し、新たな道徳論を構想し、宗教の将来のあるべき合理的あり方として「倫理的宗教」を提唱するのである。

この井上と同じ『哲学雑誌』の第一六〇号（明治三三年六月）に清沢は「宗教と文明」を発表する。清沢はそこで近時の流行として「将来の宗教」に関する論議があることを確認する。そして倫理と宗教の関係について、宗教と倫理とはそれぞれ独立の地位にあり、混合されるものではないことが論じられていく。清沢が指摘しているものは、明らかに井上であり、それは「倫理的宗教」として宗教を倫理に回収する議論を原理的に拒否するものと考えられるのである。

この議論と同時期に雑誌『精神界』は発刊され、清沢の思想の代表とされる「精神主義」が唱道される。つまり、清沢の説く「精神主義」は、本質的に反井上哲次郎的な性格を持つと見做すべきものである。

四 清沢による俗諦説の問い直し

明治三十四年十二月十五日付の『精神界』第十二号に暁烏敏の「精神主義と性情」という文章が無記名で掲載される。この文章が罪悪を恣にするものとして、大きな批判的となる。その批判の嚆矢となったのが、花田衆甫である。花田は批判の中で真宗には「俗諦」として倫理道德の教えがあることを主張し、その後「精神主義」批判から真宗二諦義の顕彰へ向かっていくことになる。その花田の俗諦論は、他力の信心が世間道德に資助を与え全うさせるというもの、言わば「俗諦流出説」である。

明治三十五年頃、清沢が対峙したものは、一つには井上哲次郎に代表される倫理的宗教論であり、もう一つが花田衆甫に代表される真宗の俗諦流出説であった。清沢最晩年の明治三十六年五月に『精神界』に掲載された論文「宗教的道德（俗諦）と普通道德との交渉」は、まさにこれらの主張に応答するために執筆されたのである。

明治三十六年六月一日付の暁烏敏宛清沢書簡によれば、執筆にあたり学究的根拠として『大経』三毒段に注目したとされる。この三毒段では「修善」が勧められ、修善の目的として「願度世」が説かれる。しかし、親鸞思想において、修善は自力の行であり往生の因とは認められない。ではその親鸞思想を踏まえた時、この経文は何を教えるものとして理解されるべきなのか。清沢の思索の結論は、この論文における「修善はその実行が出来難いことを自覚させるための契機だ」というものであった。

このような過程を経て清沢は、真宗正依の『大経』を根拠とし「俗諦流出説」から「俗諦案内説」へと転回を遂げたのである。そしてそこに至る清沢の営為は、従来の真俗二諦論が国家主義的道德に回収されてしまうものであったことに対し、そのような道德とは異なる独自の価値を宗教はもつということを示して、どこまでもその国家主義と対抗する普遍的領域を確保しようとしたものであったと考えられるのである。

おわりに

本稿は、おおよそ明治三二年から最晩年の明治三六年までの清沢の思索を辿ろうとしたものである。そこで注目したのは、巢鴨監獄教誨師事件であり、また井上哲次郎の倫理的宗教論の提唱であった。そして清沢は、このような社会での議論に対し、常に真宗の教法を念頭に置いて応答しようとしていたのである。

その中で、清沢によって最も意識されていたと考えるのが、井上哲次郎を代表とする国家主義的道德であった。清沢は、少なくとも井上の倫理的宗教の提唱の後にはこれを拒否する姿勢を明確に示しており、それ以前の『有限無限録』などから表現の仕方を変更した。そしてそれ以降の「精神主義」に代表される清沢の思想は、基本的に国家主義的道德に対峙する立場に根差したものと考える。

そのように清沢の思想を見ることができたとして、その意図したところの全体を清沢の周囲の者が汲み取れたかは問題である。それは今後の課題としたい。